〈書　評〉

新城俊昭著『高等学校　琉球・沖縄史』

――沖縄の歴史「教科書」――

阪本宏児

（一）

本書は、高等学校用教科書の体裁をとりつつ、琉球諸島(1)の通史を記述している。著者は沖縄県在住の高校教員であり、本書について、「私たちにとっての地域とは、もちろん琉球・沖縄のことである。琉球・沖縄の歴史から先人の経験を学ぶとともに、日本、アジア、そして世界の歴史を見る目を養っていければと思い、本書をまとめた」（「はじめに」）と記している。本書は、琉球・沖縄という、現在日本国にありながらも、国内の他地域とは歴史的・文化的内容を大きく異にする地域を、高校生とともに学ぶ手がかりといえるだろう。既に沖縄県内の約半数の高校では、選択科目の「副読本」などとして実際に用いられており、今後利用の範囲が広まることは確実と思われる(2)。

（二）

『琉球・沖縄史』は次のような構成をとっている。本書の特色は章立てよりも、そのなかの節立てにこそよくあらわれているが、ここでは省略する。

第一部　先史時代
　第一章　琉球文化のあけぼの
第二部　古琉球
　第二章　琉球王国の成立
　第三章　大交易時代の琉球
第三部　近世琉球
　第四章　島津の侵入
　第五章　琉球処分
第四部　近代沖縄
　第六章　沖縄県政のはじめ
　第七章　一五年戦争と沖縄
第五部　戦後沖縄
　第八章　米軍占領・支配と祖国復帰運動
　第九章　施政権返還後の沖縄

各部はそのまま琉球・沖縄史の時代区分を意味している。各章の冒頭には、「世界と日本の情勢」についてまとめた記述があり、欧米や中国・日本の歴史的動向のなかに該期の琉球・沖縄を位置づけている。では、本書の歴史叙述の特徴はどのような点にみられるのだろうか。以下、各時代の概要に触れながら、代表的な高校用「日本史」教科書との比較を通して述べてみたい。比較の対象には『新詳説日本史』（一九九五年、山川出版社。以下『詳説』と略す）を使用する(3)。

琉球諸島における先史時代は、「日本」とは大きく異なり一二世紀頃までを指すが、この時代の文化的様相や時期区分は、沖縄島と先島諸島（宮古・八重山）ではまた異なる。筆者は各々の地域について考古学的な時期区分に従って詳述している。第一部の特色として、最近の考古学的研究の成果が、かなり意識されていることがあげられよう。本書では随所にコラム欄が挿入されているが、先島諸島の土器編年に関わるそれは非常に専門的な内容であり、高校生ならずとも一読しただけでは理解しづらいのでは、と懸念されるほどである。琉球諸島では日本の律令体制期にみられる政治史や制度史などの諸記述が省けるため、考古学的内容が詳細になるのは必然的な面もあるが、『詳説』の第一章「古代国家の起源」における「旧石器」

〜古墳時代の説明は、十年間まったく変わらぬ古色蒼然たるもので(4)、両者の編集方針の違いは特に指摘しておきたい。

第二部「古琉球」は、琉球王国の成立と「大交易時代」を中心に展開する。日本の中世にほぼ相当する時期である。琉球諸島に遺る当該期の文献資料はごくわずかで、王国内の権力闘争を中心とする記述は、一七世紀以降に王府で編纂された「正史」類と各地で流布している伝説的な史話に依拠するほかない。そのため著者は、数々の王朝交代劇や英雄伝説が、易姓革命論や「こうした時代によくみられる為政者側の論理」(四五頁)に裏づけられていることを繰り返し解説している。有名な八重山の「オヤケアカハチの乱」は、四頁にわたって扱い、通説の問題点などを丁寧に述べている。著者は、記述が人物と事件の羅列になることを避けつつ、資料が絶対的に少ないこの時期を巧みにまとめた。なお琉球王国の「三山分立」は、『詳説』の琉球・沖縄に関する本文の記述中、もっとも分量が割かれている事項で、挿図と本文六行分(一二六頁)があてられている。

第三部「近世琉球」では、一六〇九年の島津氏による琉球侵略から「琉球処分」に至るまでの王府の政治と琉球社会の様相が、日本と清との関係を織り交ぜながら述べられている。島津氏の琉球支配は、王府による苛酷な先島統治をもたらすが、先島諸島の状況も詳しく触れられている。第三部を読むと、「琉球処分」以前の琉球が、中国といかに関係が深く、またその関係を重視していたかということを改めて認識させられる。王府は島津氏の支配を受けていることを明・清に対し隠蔽し続け、また日清戦争以前の王国内では、親中国派と親日派との角逐がしばしば起きていた。

ところで、島津氏の琉球侵略は、奄美諸島の日本編入と琉球王国の独立国としての実質的な終焉をもたらし、今日的日本国家の成立を考えるうえで重要な意味を含んでいた。しかし『詳説』では、このことに第六章第二節「幕藩体制の成立」のなかの一項目、「初期の外交」のごく一部をあてているにすぎない(一七七頁)。

いわゆる「琉球処分」(5)をめぐる本書の記述も興味深い。この「処分」に関連しては、一八七四年の「征台の役」(『詳説』二五〇頁)の口実となり、琉球人が「日本人」であることを清に認めさせることになった「琉球船の台湾遭難事件」と、宮古・八重山を清領に編入することで、日清間で一度は合意に達した「分島・増約」案の問題(一八八〇年)という、やはり日本国家の成立にとって見逃せない二つの事件が存在していた。『詳説』は前者について「琉球民保護の責任問題がもつれ」と記してはいるものの、後者に関しては何も触れていない(6)。宗主国の清をたのんで日本帰属を拒否した琉球が、結局強制的に「併合」される過程も捨象されている。

琉球王国の存在と解体は、沖縄県内の高校生にとどまらず、本州系日本人にとっても、確実に示されるべき歴史である。この点でも本書と既成の教科書との乖離は余りに大きい。

(三)

『琉球・沖縄史』は、註・コラムの形式などを含め『詳説』とよく似た構成をとっている。一頁あたりの字数も同じで、本文の頁数は後者が三六三頁、前者は三〇六頁である。しかし、近代以降の頁数では『詳説』が三頁ほど多いにすぎず、近・現代史叙述の充実は本書の際立った特徴といえよう。三六頁に及ぶ第七章のうち「沖縄戦」に関する記述は一七頁にわたり、その内容はこの戦争の事実と特徴を知る格好の概説となっている。また本章では日本や辛亥革命以降の中国、ヨーロッパの動向も平明に描かれている。いうまでもなく、一九八〇年代に「第三次教科書訴訟」で争点とされてきたような諸事実は、近年の社会的動向も踏まえて詳述されている。

さて、アジア・太平洋戦争における「沖縄戦」は、多くの本州系日本人にとって、「日本史」上の一事件にすぎないであろう。しかしながら沖縄社会には、そこに起源を有する多くの深刻な問題が、いまもって解決の糸口も摑めずに残されたままにある。筆者は、米軍による占領・統治と基地問題が、「沖縄戦」の結果もたらされたものであることを明記している(二六三頁)。「沖縄戦」のまとめには、

それを「日本帝国主義」との「一体化の裏返しにほかならない差別と偏見がもっとも露骨にあらわれた局面」として認識する『沖縄県史』の記述が引用されている。この認識と呼応するように、第六章では「一体化」の開始、すなわち「沖縄県政のはじめ、いわゆる大和世（ヤマトユー）の幕開け」（一七三頁）における、「日本国民の権利よりも義務を先行させ」（二〇〇頁）た東京政府の諸政策について述べられている(7)。筆者は、「沖縄戦」とその後にもたらされた状況の原因を、沖縄県の地政学的条件に帰するのではなく、歴史的な経過のなかに見出しているのである。

一方、今回『詳説』を検討してみて、客観的・事項羅列的で受験向き、と一般にイメージされているであろうこの教科書には、とりわけ近代史の記述に多大な問題点が含まれていることを強く印象づけられた(8)。それでも、沖縄近代史の過程には一瞥が与えられており、「近代の沖縄」と題する九行ほどのコラム（二五一頁）が掲載され、島津氏の支配から「復帰」までの沖縄の「悲劇」を通観している。

第五部は、いわゆる「アメリカ世」から今日までに至る現代編となる。著者は占領下の政治の推移と社会の様相を、沖縄戦後史を語る際のいわばキーワードである、「忘れられた島」「太平洋の要石」「島ぐるみ闘争」といった言葉を絡めながら記述している。米軍占領下の琉球諸島については、やはり『詳説』では一切とりあげられていない。「ガリオア資金」「冷たい戦争」「朝鮮戦争」等の事項は、『詳説』でも当然に登場するが、それらと占領下の沖縄との関連性を明らかにするような解説を求めるのは無理なのであろうか。

第九章は、「新生沖縄県の出発」として一九七二年五月一五日から始まる。「復帰」にともなう社会・経済政策と自然環境問題を中心に述べられているが、二十数年ほどの過去に一七ページを要していることは、やはり従来の教科書との大きな相違である(9)。本章では政治動向を記すなかに、しばしば「保守」と「革新」という言葉が使われている。「復帰」後の沖縄政治は、ほぼ一貫して「保革」の別が明瞭であり、両者は政治勢力として拮抗してきた。とはいえ、沖縄県における「保守」とは何か、「革新」とは何かということは、県内諸政党の変遷図（二六八頁）などと関わらせて、どこかで説明されるべきではなかろうか。

（四）

『琉球・沖縄史』の具体的な記述内容について、『新詳説日本史』との比較を通じて時代別にその概要を述べてきた。「教科書」としては非常に個性的な本書の記述は、この本が一人の筆者によって著されたことと無関係ではあるまい。単独の著作者による歴史教科書といえば、家永三郎による『新日本史』（三省堂）が想起されるが、本書は「家永日本史」と同様、あるいはそれ以上に著作者の歴史の見方が存分に加味された、一冊の歴史の本として提出されている。

ところで、「はじめに」では、「抽象的・一般的な形でまとめられた歴史像に、地域のより具体的に掘り下げられた歴史事象を照らしあわせることによって歴史の本質にせまる」ことが説かれている。しかし本書は、文部省検定済の「一般的な形でまとめられた」はずの「日本史」像に対して、むしろ根底的ともいうべき見直しを迫っているように思われてならない。琉球諸島という「地域」は、それが国家を形成していたという点だけをとりあげてみても、日本史研究のなかで従来論議されてきた「地方」「地域」とは明確に異なる存在である。今日では歴史学もようやく琉球・沖縄を、アイヌ民族の存在とともに、「日本」を考えるうえで重要かつ不可欠な、新しい視点として位置づけるに至っている(10)。本書も「琉球処分」をめぐるコラム（一七二頁）や「日琉同祖論」に関わる文脈を通じて、日本国家と「民族」という問題を暗示しているように受け取れる。しかし教材としての性格からか、この点について結論的な何かを直接提示するような方法はとられていない。琉球・沖縄にどのような位置づけを与えるのかは、読後の判断に委ねられているといえよう。

最後に、とりわけ一九八〇年代に入り、沖縄の側から強調される

ようになった、「本土（ヤマト）」に対して「沖縄（ウチナー）」を相対化して捉える思想・視点に触言しておきたい。具体的には「琉球弧」という概念の定着(11)や、「大和マスコミの沖縄ブーム」とは「意味合いがかなり違う」と指摘された、「沖縄内の沖縄ブーム」と呼ばれるような潮流(12)などがそれである。実は、本書の刊行にあたって最も刮目すべきは、客観的には右のような思潮に連なりながら、ついに沖縄では国家公認の歴史像を相対化する試みが始められた、という点ではなかろうか。一国のなかで、多様な教育内容がある程度許容されている状況は、ヨーロッパの一部などでは今日珍しいことではないだろう。しかし「単一」の民族構成と国家的価値に基づく歴史観を標榜し続けようとする日本国において、本書の登場は画期的であるというほかはない。

刊行間もない本書には、歴史的用語や表現の整備において見直すべきと思しき箇所も少なくない。今後、本書がよりよい改訂を加えながら、「本土」の学校にも浸透していくことを期待したい。

（沖縄県歴史教育研究会　一九九四年第一刷　頒価一〇〇〇円）

注

(1) 本稿では奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島の総称を指す。

(2) 本書の利用の現状については、新城俊昭氏より御教示を頂いた。

(3) 周知のように、この教科書は全国で採択される「日本史」教科書のうち約五割の比率を占めている。

(4) 一九八四年発行の『詳説日本史』との記述内容における実質的相違はまったくない。なお、『詳説』は「南島文化」について註で一行足らず触れている（一六頁）。

(5) 「琉球処分」という言葉は、本書のなかで鉤括弧なしで用いられている。日本による琉球王国の解体・併呑を、本書が旧来通りの用語で呼称することには、やや違和感も覚える。

(6) 「分島・増約」案をとりあげた「日本史」教科書が存在するかどうかについては、調べることができなかった。

(7) 「旧慣温存政策」は廃藩当初からの政府の政策ではなかった、とする説なども併記されている（一七四頁の註）。

(8) 例えば、ソ連の対日参戦を「満州・朝鮮」への「侵入」（三三四頁）と記すのに対し、日本による中国侵略は「華北への進出」、「軍事行動」の「拡大」（三二三頁）等とされる。日本の対外侵略をめぐる諸々の記述と用語には、概してその侵略性を糊塗・緩和するような表現が慎重に選ばれている。

(9) 『詳説』における一九七〇年以降の記述は七頁である。内容の改訂には周期の問題もあろうが、日本国内の政治動向は一九九四年まで跡づけていながら（三六〇頁）、世界の情勢は一九八九年段階の東欧・ソ連の動向を記するにとどまっている（三五八頁）。

(10) 植山淳「『戦後の歴史学と歴史意識』とその後の四半世紀」『京浜歴科研年報』第九号（一九九五年）、参照。その際、沖縄の特質から「日本相対化の歴史的必然性」を指摘し続けてきた安良城盛昭の議論を忘れることはできない（『天皇・天皇制・百姓・沖縄』一九八九年、吉川弘文館）。

(11) 「本土（ヤマト）」と拮抗する独自文化圏を指すものとして「琉球弧」ということばが、大衆性を獲得し市民権をえたのは、ここ数年来のことである」と指摘されたのは、一九八二年である（新崎盛暉「〝本土化〟の奔流に抵抗」『毎日新聞』一九八二年一二月一〇日）。

(12) 新城和博『うちあたいの日々』（一九九三年、ボーダーインク）による。例えば、一九八九年に刊行されて地元の本としては破格の売れ行きを示したという、まぶい組編『事典版おきなわキーワードコラムブック』（沖縄出版）は、沖縄・先島の社会と文化の独自性に対する、「復帰」後世代による再評価作業といった色彩を有している。